

# J-STAGE NEWS

## 1-2LIVE J-STAGEニュース

電子ジャーナルの最新情報をおとどけるJ-STAGE機関紙

No. 39

P-ISSN 1346-1990  
O-ISSN 2434-4311

2018年12月14日発行

国立研究開発法人  
科学技術振興機構

### 今号の記事

- ◆ご挨拶 (科学技術振興機構 知識基盤情報部長)
- ◆J-STAGE トピック、サービス紹介 (JATS バージョンアップ・J-STAGE 機能拡張、COUNTER レポート)
- ◆シリーズ学会訪問 ～日本農業学会～
- ◆J-STAGE 公開・アクセス状況
- ◆J-STAGE からのお知らせ -BIB・SGML 形式を廃止いたします-
- ◆編集後記

## ご挨拶 ～新時代の J-STAGE サービスに向けて～



科学技術振興機構  
知識基盤情報部長  
小賀坂 康志

10月の日本経済新聞に「論文はだれのものか」と題した連載記事が3回にわたって掲載されました。最終回では、野依良治名古屋大学特別教授が日本発の魅力的なジャーナルの必要性を訴えておられます。他紙ではプレプリントサーバーや predatory journal (ハゲタカ出版) の話題が取り上げられ、さらに Science や Nature が論文の再現性の問題を取り上げるなど、国内外ともに学術論文に関する話題に注目が集まっています。こうした中、日本発のジャーナルにも注目が集まるとともに、期待も高まっているといえるでしょう。

J-STAGE は、運営開始当初の政策目標である「電子化推進」に加え、「国際発信力強化」や「オープンアクセス推進」を新たな目標に据えており、その存在は重要性を増しています。この根底に包含されるのは「日本発の学術ジャーナルの質の向上」であり、ジャーナルの発行母体である学協会にとっても重要な課題です。J-STAGE では今一度こうした政策背景を踏まえ、今後のあり方 (中長期戦略) を検討しています。

中長期戦略のコンセプトの一つは「利用機関との共創」です。これまで J-STAGE は、利用者からのご要望を踏まえてサービスの充実を図ってきました。しかしながらジャーナルおよび学協会のあり方は不可分であり、学協会自身によるジャーナル戦略なくして、ジャーナルの質の向上は望めません。

このような考えの下、J-STAGE はこれまでの取り組みを進化させ、「学協会が定めるジャーナル戦略との連携」によってサービスを発展させていくことにしました。利用機関におかれては、ジャーナルをどのような観点において、どのように質を高め発展させていくのか、そこにはどのような戦略が必要なのか、そしてその中で J-STAGE をどのように利用していくのか、議論を行っていただきたいと思います。JST はそうした戦略性を最大限発揮できるよう、サービスの開発に努めていきます。J-STAGE は「自ら助くる者を助く」事業へと変革します。

新時代の J-STAGE にご期待ください。

J-STAGE でダークアーカイブサービスの提供を開始いたしました。詳しくは下記をご覧ください。

<https://www.jst.go.jp/pr/info/info1349/index.html>



# J-STAGE トピック、サービス紹介

## ★ JATSバージョンアップ (0.4→1.1) に対応。J-STAGEの機能も拡張

J-STAGEでは2012年よりJATS\* 0.4に準拠したXML形式を使用してきましたが、2019年3月下旬(予定)よりJATS 1.1に準拠したXML形式に変更いたします。併せて、CCライセンスをはじめとするオープンアクセスに関連する表示や書誌項目の追加など、機能拡張を行います。詳細な日程は、決まり次第お知らせいたします。

詳しくは、2018年11月28日のリリースノートをご覧ください。https://www.jstage.jst.go.jp/static/pages/News/TAB5/Page1/-char/ja#20181129

\*JATS(Journal Article Tag Suite)とは、学術情報を記述するための米国情報標準化機構(NISO)のXML規格です。

### ■JATS1.1対応 全文画面表示(一例)■ 赤色：追加表示

### ■画面表示別 JATS1.1追加表示■

画面表示	日・英抄録 同一画面	ファンダ情報 ステートメント	注釈	脚注	関連 文献	付録	用語集	略歴
全文	●	●	●	●	●	●	●	●
書誌	—	—	—	—	●	—	—	—

### ■オープンアクセス関連の機能拡張■

	機能拡張後	従来
J-STAGE トップ画面	オープンアクセスまたはフリーで閲覧できるジャーナル数・論文数の表示	—
詳細検索画面	検索条件にCCライセンスを追加	—
個別ジャーナルのアクセスポリシー	「オープンアクセス/OPEN ACCESS」の選択・アイコン表示可能	—
個別ジャーナルのCCライセンス表示	記事単位で設定可能 著作権情報と併記可能	資料単位で同一設定 —

### ■追加される書誌項目(抜粋)■ \*はXML登載、Web登載ともに可能

追加項目	概要
関連文献*	引用文献とは別に、関連する文献をリンク付きで表示可能
著者・所属機関の国情報*	著者と所属機関の、所属する国・地域名を表示可能
著者区分*	編集者、翻訳者などの区分追加
原稿種別	要約、講演記事などの種別追加
CCライセンス表示*	CCライセンスの種類、内容、URLを表示可能 ほか
その他	arXiv ID表示*、ORCID IDの認証設定*、引用文献区分の追加* ほか

### ■XMLファイルに関する変更■

変更事項	概要
DTD	アップロード用XMLファイルで使用するDTDを、JATS1.1準拠にする
全文XML	FULL-J、FULL-Pに項目を追加(注釈、脚注、ルビ ほか)
PMC用XMLファイルと形式一致	タグの利用形式を一致させる

## J-STAGE サービス「COUNTERレポート」が、“Release5”へ切り替え

J-STAGEでは、公開システムで取得したアクセスログを、COUNTER (Counting Online Usage of Networked Electronic Resources) 規格に準拠し集計した「COUNTERレポート」として閲覧機関に提供しています。Release5 (R5) の公開に伴い、2018年10月分からRelease4 (R4) に加え、R5レポートも試行的に提供しています。R5への正式な切り替えは2019年1月分からを予定しており、現行のR4レポート提供は2019年3月分までとなります。

R5では、2種のレポート(下記)を出力できます。COUNTERレポートサービス利用者が出力項目をカスタマイズできるレポート(PR、TR)も加わり柔軟性が高まっています。また、SUSHI (Standardized Usage Statistics Harvesting Initiative) APIの提供により、レポートの自動収集も可能になりました。

### ■R5のレポート概要■

レポート種	レポート名	略称	概要
Usage Platform Report (集計対象：全閲覧誌)	Platform Master Report	PR	全閲覧誌の使用状況の集計。カスタマイズ可能
	Platform Usage	PR_P1	メトリックタイプ <sup>※1</sup> 別、全閲覧誌の使用状況の集計
Usage Title Report (集計対象：閲覧誌ごと)	Title Master Report	TR	使用状況の集計。検索条件・出力内容をカスタマイズ可能
	Journal Requests (Excluding “OA_Gold”)	TR_J1	特定のメトリックタイプの集計 <sup>※2</sup>
	Access Denied by Journal	TR_J2	アクセス拒否の集計
	Journal Usage by Access Type	TR_J3	アクセスタイプ別の集計
	Journal Requests by YOP (Excluding “OA_Gold”)	TR_J4	発行年単位の使用状況の集計 <sup>※2</sup>

※1: どのような状況で該当記事にアクセスしたか(例: 検索、コンテンツにアクセス) ※2: アクセスフリー/オープンアクセスを含まず

詳しくは、下記をご覧ください。

- ・ COUNTERレポートサービス : https://www.jstage.jst.go.jp/static/pages/OtherJstageServices/TAB1/-char/ja
- ・ COUNTERレポートサービス 統計データ解説書(R5) : https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/COUNTER(R5)Document.pdf



## 【シリーズ学会訪問】 ～日本農薬学会～

日本農薬学会編集委員長の中川好秋准教授に学会の活動と英文誌「Journal of Pesticide Science (JPS)」発行（年4回）に掛かるエピソード、日本の学協会を巡る情勢についてお伺いしました。

中川先生は2017年より編集委員長を務められ、現在は日本農芸化学会学術強化委員、日本薬学会構造活性相関部会部会長、IUPAC Subcommittee memberとしても活躍されています。

### ●貴学会および「JPS」誌の沿革、特徴についてお聞かせください

本学会は1975年に設立された作物保護や農薬を巡る諸問題を考え研究する団体です。作物保護や農薬を巡る諸問題を考える学問・技術の発展、すなわち農業科学の発展を通して人類の福祉に貢献し、さらに人口爆発、地球環境破壊（汚染）など、人類の諸問題の解決に寄与することを目的にしています。JPSは、フリージャーナルであるにもかかわらず認知度が低いことがわかり編集委員長を拝命以来、オープンアクセス化よりもPubMedへの掲載を優先して取り組んできました。2017年末に申請し、2018年の10月26日に2016年にさかのぼってVol.41 issue1からPMCのジャーナルとして採択されました。



左：京都大学農学研究所 中川好秋准教授  
右：Journal of Pesticide Science

### ●貴学会誌の情報発信への取り組み、論文の投稿から公開までの期間短縮へ向けた活動についてはいかがでしょうか

2001年よりJPSの電子化に向けた準備を行い、2005年にJ-STAGEでの公開\*を始めました。安藤前編集委員長の時代にEditorial Manager (EM)を導入しました。論文受付から公開までに最も時間を要するのは論文査読であり、農薬の研究は分野が広いことから虫、草、菌、環境その他の4部門に分けて部門長が2人の審査員を選び、そのコメントを基に採択の可否を決定しています。論文の審査が停滞している場合は審査を早くしていただくように促しています。 \* <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jpestics/-char/en>

### ●J-STAGE ご利用のきっかけ、J-STAGEへ期待することは何でしょうか

私が常任編集委員のときに学会誌の電子化を担当しました。その頃、農芸化学会の英文誌の有機化学部門の編集委員も努めていたので、J-STAGEについてセミナー等で情報を収集し、ほぼ同時期にJ-STAGEでの公開を始めました。J-STAGEは、システムが複雑になりすぎているのではないかと思います。ワードやエクセルもそうですが、登場したところから比べると確かに何でもできるようになっていますが、その反面、はるかに複雑になって装備されている機能をどの程度使いこなせているのか怪しいです。画面のクリック操作ももう少しわかりやすく、つまりシンプルで使いやすいシステムを望みます。

### ●最近の日本の学協会を巡る情勢、今後の学会誌の電子ジャーナル出版のあるべき方向性についてはいかがですか

これまで、複数の海外出版社からJPSの出版をしたいという依頼がありました。すべてを出版社に任せれば確かに楽になるかもしれませんが、いったん預けると元に戻すことはできません。海外の出版社に任せたと学協会もあるようですが、任せてよかったという評価はあまり聞いたことがありません。JPSの編集事務局ではアルバイトを1人お願いしていますが、隣にいるわけではなくE-mailでのやり取りです。隣にいないので、少し手間が掛かりますが、投稿・査読はEMで行っているのもそれほど負担にはなっていないと思っています。

編集委員長になった当初は、JPSの審査論文掲載数は年に25件あるかないかでした。あまりに質の悪い論文が投稿されるために採択率が低かったことが原因でした。それから約2年の間に特集を組んだりし、レベルの高い論文の投稿数も増え、今年になってインパクトファクターも初めて1を越えました。海外の出版社などに頼らず、自分たちの努力だけでここまでできたと感じています。

### ●最後に貴学会の今後の方針（抱負）について教えてください

まずは、オープンアクセス化を推進することです。また、学協会が出している雑誌はもともと学会員の発表の場としてのものですが、最近では学会員以外の海外からの投稿も多くなったもののその大半は発展途上国からで、欧米からの投稿をいかに増やすかという課題があります。今年、PubMedにリストされたことでどうなるか期待しています。多くの学会で会員数が減少しており、それをいかに食い止めるかも課題です。農薬学は化学、物理、生物、数学、社会科学など多様な学問領域にわたっています。企業の会員を含め、多くの研究者から論文を投稿してもらい、日本発の農薬に関する論文をJPSにどんどん掲載しJPSのインパクトを強めたいと考えています。

ありがとうございました。J-STAGEもオープンアクセスの推進に頑張ってください

## J-STAGE公開・アクセス状況

J-STAGE は 1999 年にサービスを開始してから、公開ジャーナル数が年々増加（表 1）し、2018 年 11 月 22 日現在、2,715 ジャーナル（予稿集等も含む）、471 万 8,880 記事を公開しています。公開ジャーナルを言語別にみると和文誌 38.2%、英和混在誌 36.7%、英文誌が 16.7%となっています（図 1）。

また、J-STAGE のアクセス・ダウンロード数も増加しています（図 2）。国際発信力強化につながるプラットフォームを目指して、2017 年 11 月には J-STAGE の画面をリニューアルしました。モバイルにも対応し、よりアクセスしやすい環境になっています。また、月間アクセス数ランキングやジャーナルインパクトファクターの表示、My J-STAGE 自動ログイン機能の追加など、さらに便利になった J-STAGE をぜひご活用ください。

表 1. J-STAGE 公開ジャーナル数

	2016 年度	2017 年度	2018 年 11 月 22 日現在
(1) 公開ジャーナル数	2,103	2,584	2,715
(1)のうち、新規参加機関分	186	482	133

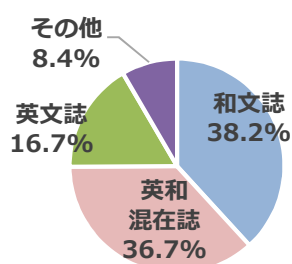


図 1. J-STAGE 公開ジャーナルの言語別割合  
(2018 年 11 月 22 日現在)

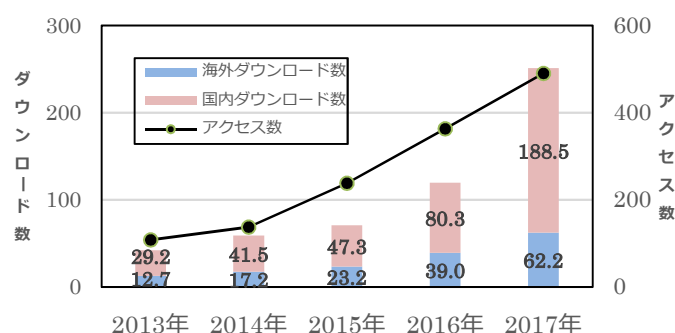


図 2. J-STAGE アクセス・ダウンロード数（100 万件）

## J-STAGE からのお知らせ —BIB・SGML 形式を廃止いたします—

J-STAGE の記事登載にはこれまでさまざまな形式を採用してきましたが、JATS の Ver.1.1 へのバージョンアップに伴い、XML の流通を促進するため 2019 年 3 月 22 日をもって、以下のファイル形式を廃止します。

- ・廃止するファイル形式：「BIB1.4 形式」「BIB2.1 形式」「SGML 形式」

上記形式で登載を行っている利用機関は、2019 年 3 月までに次のいずれかの形式に必ず移行してください。併せて、「J-STAGE データ形式変更申告書」のご提出をお願いいたします。

- ・移行形式：「XML 形式」「Web 登載形式」

[J-STAGE データ形式変更申告書] <https://www.jstage.jst.go.jp/static/pages/InformationForSocieties/TAB1/-char/ja>

[提出・問い合わせ] J-STAGE センター：center@jstage.jst.go.jp

### 編集後記

#### J-STAGE スタッフからひとこと

- ♪ 2 年ぶりに念願の J-STAGE ニュースを復刊いたしました。利用機関ならびに閲覧者へホットな最新情報をお届けしてまいります。末永くご支援よろしくお祈いします(y.m)
- ♪ 3 月より J-STAGE の運営に携わっています。より良いサービスを提供できるよう頑張ります!(k.o)
- ♪ 「●●を知りたい」「●●がわからない」など、お気軽にお寄せください。皆さまの疑問等にこたえていければと思います(k.s)

#### J-STAGE ニュース No. 39 2018 年 12 月 14 日発行

編集 : 国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST)  
知識基盤情報部 研究成果情報グループ  
発行人 : 知識基盤情報部長 小賀坂康志  
〒102-8666 東京都千代田区四番町 5-3 サイエンスプラザ  
電話 : 03-5214-8837(ダイヤルイン)  
E-MAIL : contact@jstage.jst.go.jp

J-STAGE [www.jstage.jst.go.jp](http://www.jstage.jst.go.jp)

J-STAGE および J-STAGE ニュースに関するご意見・ご質問をお待ちしております。

JST 知識基盤情報部 研究成果情報グループ (contact@jstage.jst.go.jp)

© 2018 Japan Science and Technology Agency